

以下は、沖縄部隊の機関紙「守礼」に掲載された(昭和 51 年 1 月、3 月、4 月号)当時団本部 2 等陸尉であった小生の「蛙の欧米見てある記」と題する初級幹部欧米研修所見録である。実は、本連休を利用して今まで整理したくとも出来なかったアルバムを整理した。「100 枚の写真に見る山下の人生」を作成せんとするものだ。偶々、小生が初級幹部として返還直後の沖縄勤務時代に機関紙に投稿した記事が見つかったので、今読み返しても、さほど色褪せているとは思えない面も多々あると思われるので、それを紹介したい。在りし日の青年将校の思いの一端を知って頂ければ幸甚である。

昨年十月十一日から十一月九日迄の一ヶ月、昭和四十九年度初級幹部研修生の一員として欧米五ヶ国一仏、西独、スウェーデン、英国及び米国一の研修をさせていただきました。

本研修間、井の中の蛙は色々な体験をし、様々な事を感じてまいりました。守礼の紙上をかりて報告させていただきます。我々の見聞したものはその局部においては事実であっても、必ずしも全般的なものであるとは限らないということをおぼろげに断わっておきます。

#### 一、研修団の編成及び日程の概要

研修団は、団長以下 15 名。団長は海外経験 7 回目の林一佐、計画幹部兼副団長池野三佐、研修生は、幹候四十五、六期の二等陸尉十三名。計画幹部以下十四名は何しろ国外は初めてであり、それ故に全ての面において団長に負う所概めて大であった。

日程の概要について。10月11日工一フランス機で羽田を出発し、モスクワ経由でパリに到着。じ後仏にはパリニ泊、ベルダニー泊ビッシュに泊してパリ市内研修及び仏軍の訪問。仏から西独へはバスで行き、西独連邦軍の研修及びベルリン研修等をボン・コブレンツ・ハンブルク及びベルリンで実施した。じ後スウェーデンへ飛び、同じく陸軍部隊を研修。その後英国は五日間主としてロンドン近郊の士官学校、陸軍部隊及び郊外の研修、夜はロンドン市内の自由行動であった。更にロンドンからパリを経由し大西洋を飛び越えてニューヨークを振り出しにワシントン、フォートベニング、エルパソ、ハワイと米国の研修を 11 日間実施して、ホノルルから日航機で羽田へ到着した次第です。

本研修の目的にあわせて、軍施設宿泊とホテル宿泊が半々、かつ日々の行動も市内研修と軍訪問が半々でありました。語学のほうは、1 年前に英語課程を終了してはいるもののやはり苦勞致しました。

しかし日常の行動にはさして問題もなく何とか用はたせたという状況でした。しかし特に英、米において英語がよく通じずその他の国においてかなり通じたのはお互い片言同志であったせいでしょう。

#### 二、全般的な所見

初めて外国に接した最大の収穫は話す言葉は勿論風俗習慣も違うけれどもその中身は我々と同じく温い人間の血が流れていることを知った事です。

次に各国の軍隊を訪問して感じたことは所謂平和時の軍隊として共通した悩みをどこの国も持っている。そしてその解決に真剣に取り組んでいることを知ったという事です。

第三に日本人や日本企業の進出ぶりに驚かされました。夜の歓楽街例えばパリのモンマルトルとか西独のハンブルクとかハワイのホノルル等を歩いていると日本人として実に恥しい思いをする事が度々あった。ストリップ劇場の呼び込みが我々をみかけると頭越しに日本語で何を語しかけるか相像できるでしょうか。週刊紙等に見られる独得な卑わいな言葉で呼びかけるのです。その気はあっても一ぺんに吹きとんでしまいそうです。それだけ日本人は金を持った好色人種として見られているのでしよう。

第四にベルリンの壁を前にし、かつソ連の兵を見、東独の監視兵をみたときの緊張感は忘れられない。今なおこういう状態の続いていることを想うと、同じ敗戦国であってもまだ日本は幸せであったと思わずにはおれない。

第五に、中立国スウェーデンに接して中立の維持がいかに大変な事であるかを知らされた。見学する機会は少なかつたけれども戦時滑走路に指定されている高速道路やフィヨルド内の潜水艦の格納庫地下室兼退避壕設置の義務づけなどがある。郡

軍について言えば世界でも屈指のジェット戦闘機を生産輸出し、新型の S 武戦車を持ち、国民には、兵役義務が課せられ、戦時には数十万の軍人を動員出来る。年に 1 回、その種動員訓練を行っているそうである。また、中立国とは別に NATO は NATO でそれなりの努力をしている。国民の広範な理解のもと真剣な国防努力を払っている各国をみるにつけ、日本の現状を良しとすることは川来ない様である。

第六に、部隊そのものの精強度を自分なりに判定してみると我自衛隊も決してひけをとることはなかろうと思う。しかし驚いたのは、米陸軍第 25 師団(ハワイ)下士官集合訓練である。朝三時半頃からよる 10 時頃まで訓練が行われ、一ヶ月間の訓練時間が何と四百時間にもものぼる。勿論落伍者は居るそうである。帥団長は黒人の将軍であり 44 才という年令にもかかわらず毎制約 5 km の駆足を実施しており常時出動しうるように通常作業服で勤務にあるという。我々が訪問した時も作業服でこられて挨拶をされ、これにも少々驚かされた。

以上全般的な所見であるが次号から各国別に詳しく述べたい。

## 二 出発～ソ連～フランス

十月八日、市ヶ谷畦とん地に集合し最終的な出発準備をする。パスポートの受領、換金、航空券の確認等と、陸幕長に申告して出発準備は終わった。陸幕長申告時、英語のテストがあるとの情報があつて、応接室での想談の時は緊張していた。しかし能力は先刻御承知のためか何もなく、「十分に楽しんでいっちゃーい」の言葉が天から聞えたように感じられた。

十日は休日、東京近郊の者や新婚は家に帰り、残った者もそれぞれ手紙を書いたり、しばし別れの日本料理を味わって静かに暮れた。明ければ出発当日。航空会社差廻しの犬型バスに手荷物を満載して羽田へ向う。出国手続は意外に簡単。免税店でセブンスターをワンカートン四百七十円で買う。飛行機はまたたく間に日本海を飛び越えてシベリア上空、「下にバイカル湖が見えます」とのアナウンスがあつた。モスクワのシエレメチボ空港まで約十一時間、ここで乗換えてパリに向うのである。空港は国際空港なのに、華やかなものは何もなく極めて質素な感じを受けた。ここで見かけたソ連の人々もまた同じ。葉書を妻宛に出したが、切手一枚買って投函するのに実に面倒だ。全く非能率的で、かつ店員が無愛想なことに驚く。葉梨によると、外国向けの郵便物はソ連情報局の検閲を受けてから配達されるそうだ。考えられることであるが、我々には驚きであった。切手は日本円で買ったことも、付け加えておく。

モスクワから約三時間、いよいよ第一目的地、パリのオルリー空港に到着。十七時を廻っていた。防衛駐在官藪中一空佐の出迎えを受けてホテルへ。ホテルは凱旋門近くのフリートラント通り。旅装を解く間ももどかしく同行の同期が三人、シャンゼリゼへと繰り出す。人間の勘は、外国へ来ても案外正確に働いて、「概ねこの方向」で歩いてもシャンゼリゼへ出て、有名な凱旋門を眺めた。通りに突き出たスナックで、ビールを注文したのはいいが大ジョッキを持ってこられてビックリ。パイに似た料理を注文したが食べ方がわからず、英語で聞いても相手に通じない。仕方なく六ヶ国語の参考書を開いて教えてもらった。ホテルに帰り着いたのは真夜中の一時過ぎ。時差が八時間あるから完全に徹夜した計算になる。

翌十二日はパリ市内研修。欧米教会会員の浅川女史(美大卒業後、絵の勉強に来ている若い娘さん)の案内で、ノートルダム寺院から始った。ルーブル美術館で、ミロのヴィーナスやモナリザに再会し、サンルイ寺院でナポレオンの墓や廃兵院を見た。昼食はかたつむり料理を楽しみ、コンコルド広場、エッフェル塔、そしてシャイヨー宮殿、エリーゼ宮も眺めた。

夜はムーランルージュを予約してあつたが、車が混雑して同行の者が遅くなり諦めて見ずじまい。それが口惜しいと例の三人でムーランルージュ界隈を散策。ストリップやセックスショップが並ぶパリ随一の歓楽街大通りを歩いていると、日本人と見て「オ OOOoO」などと店の客引きが呼びかける。日本人の旅の恥はかき捨ての行状の結果. だろうが、実に恥じい思いをした。またこの類にひっかかると、日本円にして二万円位しぼられると聞いていたので、堂々と素通りする事にした。セックスショップの方は覗いてみたが、グロテスクと云おうか実にアブノーマルな状況であつた。とかくするうち帰る方角を見失い、地下鉄を見付けて、ようやくホテルに帰つた次第

パリは歴史の町・新築する建物は周囲とマッチすることが警務づけられているそうである。町全体の美を大切にしている強い印象を受けた。(つづく)

欧州大陸独特の波状地をバスの車窓に眺め、大戦車戦の生起した今次大戦に思いを馳せつつ仏独国境の大要塞であったベルゲンに向う。1次大戦の大激戦地にたたずみ、国境特に地続きの国境の防衛の困難さを思う。

さて翌日はビッシュに移動し、第四装甲連隊の展示演習及び軍施設の見学であった。仏軍はその精強さにおいて我と概ね同等との印象をもった。何よりも印象に深く残ったのは、その日の夜日本大使館主催の正式晩さん会であった。天性の社交センスのある彼等仏軍将校夫妻及び市長等市民有志は飲み歌いかつ踊り六時間余りに亘って決して飽きさせはしなかった。我々も言葉はつたなくとも打ち興じ実に忘れ得ぬ思い出と共に仏の最後の夜は更けたのである。

#### 四、独～スウェーデン～英国～米国～帰国

理性的で親日感のあふれるゲルマン民族国家に入国したが面倒な入国手続きなど一切なく、その容易さに一同驚いた。ボンの朝市、ベートーベンの生家等の研修。ゾーリングゲンの店でのこと、店員の非能率的だが確実第一な応待ぶりに当初はまごついたが、これが民族性の違いというものかと面白く感じた。有名なライン下りならぬライン上りをローレライの岩を眺め猫城やねずみ城を遠くに望みつつ実施したり、フランクブルトのゲーテハウスやハンブルクの飾り窓の女等或いは引き裂かれた独の象徴である西ベルリンの研修そして軍の研修と、仏同様の多忙な毎日であった。

独最後の夜は、独将校宅への招待であった。私達2名のグループは通信幹部の大尉に招かれ、彼の冗舌にはすっかり閉口したが、それは彼の誠意ある親切心であったし、十二分に我々には彼の気持が通じたのである。

五日間の独研修を終り、コペンハーゲンを経由してスウェーデンのストックホルムへ。自衛隊員が、初めて訪問する国とあって、真心のこもった歓待を随所でうけた。連隊長自作の記念品の贈呈がその顕著な例であろう。残念だったのはバイキング料理を試食できなかったことである。又ここではフリーセックスのイメージは更々になく実に清潔な国であった。それは道に迷ってストックホルムの暗がりを歩いたが、ボン引きなどまずいなかったということでも実証できるのである。又武装中立国であるが、相当な国防努力を傾注し、自国は自分の手で守ろうとする自主防衛の気概に満ち溢れているのには強い感銘をうけた。

老大国英国の首都ロンドンに着いたのは、十月二十三日である。町には活気がなく、人種のるつぼと化し、今迄持っていたイギリスというイメージとは全く違っていたことには、がっかりした。歴史と伝統の国ではあるが、それのみでは生活していけないところに英国の悩みがあるように思う。ここでは陸軍士官学校、砲兵教育連隊、オックスフォード大学、ウィンザー城などの研修見学を終え市内では、自主的にロンドンタワー、ウエストミンスター寺院、トラファルガー広場、エロス像等を見学するなど、かなり強行スケジュールであった。残念なのはバッキンガム宮殿の衛兵交代式を見学できなかったことである。又華僑の進出ぶりは特に英国において目ざましく、驚きに値するものであった。

さて五日間の英国研修を終り、いよいよ後半に入り大西洋を一とび、新大陸はニューヨークに向うジャンボでは黒人の農協さんと一緒に彼女達の体臭と香水をミックスした匂いには悩殺されそうになった。米国はさすがに車社会であり活力に溢れているという印象をうけた。しかしニューヨークの夜の治安の悪さは、天下一品で好奇心旺盛な我々もその説明におじけてしまい外出をやめて長距離電話でそれに代える。忘れがたいのはニューヨークでのサッポロラーメンのうまさであった。ワシントンではホワイトハウス、ペンタゴン、リンカーン、ワシントンの記念塔、ポートマック河畔の桜並木、アーリントン墓地の衛兵などを見学した。

その後二手に別れて我々は陸軍随一の精強を誇っている歩兵学校の研修にでかけたが、ここでは、ワック三人がエアボーン訓練を受けていたのが印象に残っている。フォートブリスからハワイの第二五師団の研修を終えて十一月八日ホノルルを出発して九日夜無事羽田に到着、我々の三十日間におよぶ世界一周の旅はこれで終了したのである。

西廻りであったために随分時間を稼いできたが、日付変更線を越えたところで、すっかりもとの木あみになってしまった。

ともあれこうして終了したのであるが、もとより我々が見聞し得たものはごく一部でありその局部においては事実でも必ずしも真実ではない面も多かったろうと思う。本研修を通じて外国での見聞を広めるなど得がたき貴重な体験をさせて頂き深く感謝している次第である。まだ書きたいことは多々ありますが紙面の都合で割愛させて噴きます。御愛読を感謝致しま

す。(終わり)